



龍  
皇  
紀  
加  
史

稿  
茂  
世  
補  
筆

一

僧	5
49	
1	



5曾4門  
9号  
1卷

浮呂島日記

目次

- 一 小磯七寺ノ一 粟浪の港ノ又浮島
- 一 磯前ノ八十之添ノ一 ちのちノ島
- 一 網の浦ノ一 曝井ノ名網の濱
- 一 行方ノ郡ノ一 潮来ノ村
- 一 時平大岨神ノ一 島薄茶の庵
- 一 領中ノ庵ノ一 島子ノ領ノ堂
- 一 日本ノハノ島ノ多ノ一 胡燕
- 一 小忌ノ名ノ一 海潮ノの満ノ子



一 曼荼羅ハ九旋

○北越七奇辨

崑崙橋茂世述

後越に古く七不思議と云ふ事あり今則諸方の怪客好事  
の人け國に為る事あり其奇を探入るに云々云々云々其説  
紛々として其事と云ふべし然るに新記記行にあらず  
可と聞人家に論議するに云々云々今尚二十有四奇あり

神樂殿の神子 海鳴<sup>ホウ</sup> 明鳴<sup>メイ</sup> 燃土 七法師の滝

白兔 鎌鼬 火井 塩井 燃水 蓑虫の火

又雷 逆竹 風穴 沸壺 白螺<sup>シロカミ</sup>土用清水

四蓋<sup>シヤイ</sup>波 箭根石 三度栗 無縫塔<sup>ムホウトウ</sup> 沖の題目

八房梅 即身仏

是や一冊に在るに日本書紀の二説を本として  
徳の比昂が因好事の者偶々七奇を撰せしむるに  
世の義政將軍の比昂が風流好事今事比太平に  
りれはあはれも今何れに國の勝奇とす  
録も載せ 公聴もあはれも今何れに國の勝奇とす  
今古の別あはれも今何れに國の勝奇とす  
まはれも好事の者又あはれも今何れに國の勝奇とす  
他邦の勝奇とす 太平永く修むるに君國の  
しる民の耕作の富人が常に同多しに  
勝とるる奇を撰る 高はるるに  
水疏を通じ 田野を用ひ 深山幽谷海島河源に  
力のり届るるに 故に天の化も又盛に  
時をりて通るる木とす 百穀美し 極國の  
まはれもあはれも今何れに國の勝奇とす  
甚まらば 是を以て是を  
まはれもあはれも今何れに國の勝奇とす  
非ぬの七奇とす 欲するに  
所はれもあはれも今何れに國の勝奇とす  
七奇を撰じ 今の七奇を撰せしむるに  
為え 説論せしむるに

水疏を通じ 田野を用ひ 深山幽谷海島河源に  
力のり届るるに 故に天の化も又盛に  
時をりて通るる木とす 百穀美し 極國の  
まはれもあはれも今何れに國の勝奇とす  
甚まらば 是を以て是を  
まはれもあはれも今何れに國の勝奇とす  
非ぬの七奇とす 欲するに  
所はれもあはれも今何れに國の勝奇とす  
七奇を撰じ 今の七奇を撰せしむるに  
為え 説論せしむるに



今昔邦の醫是を石腦油に尚用ゆに甚効ありと云ふ  
是を採るに人の又林松のこころ数十年た松脂の古木大  
朽土中に落入たる松脂ツバキの腐水と相ぼゆ其方に甚油煙多  
く松の匂ひあり  
或人云松脂は茯苓より琥珀より何れ油より油ありん  
是に只土中の油ありと云ふ松脂其本より自然に  
こころり腐土中に凝塊するものにして茯苓琥珀より油より  
松脂より水より土中に腐爛せるものなり  
殊に上古北載いつたる山谷水虫の毒ありと云  
ふ水産は白のくまぐまの木の皮をむいてはるる  
近は園淨湖の産梅にりある所松皮の土中より  
其木のくまぐまの皮を採りてはるる其奇なり  
奇即可代サ菊油のりなり

其三 白兔の諸列共に是ありと云ふ他邦の白兔は昂其質  
はくはるる白く又夏にぬれたらぬ一皮色ありはるる  
越國に産する白兔の皮は秋の終りまで一皮色ありて白  
い他を採るは即後白に雪の漸きかぬ一皮色ありはるる  
はるるの皮はくまぐまを採る年中古志郡のくまぐまの頭  
白兔と云ふ一皮あり近世に採るは又信列の賢哉中  
依別を採るは白兔の皮のくまぐまを採るはるる  
宝龜五甲寅徒越國獻白兔とありては他邦に産する  
奇と採るはるるのくまぐまを採るはるるはるるはるる  
くまぐまを採るはるるはるるはるるはるるはるるはるる




方角より南へ向くはあはれなる八幡の社地ありしなり又黒  
島村の人の前より東にけしき地をゆりてあり他はせしむる  
別ゆる是亦一奇なり平近は丙寅の秋東山より西山の海を  
ほりてしるし山の嶺よりあはれは海潮のき地を境してけしき  
をせしむるなり是を以て物さるに頸城郡の能登の川を境と  
はぐの依列の南浦をほりて大洋数千里の海潮を以て  
さる所のあはれけしきをせしむる是も別なる奇なり  
阿久野の其氣海上を走ると地を微接する亦即其地を  
押して山谷に徹して時をわたりて其地を以て人を  
けしきしるす方に風のくんとする所の窓戸を以てするものん

ともしく時を煤自然の産つたあり糸帶一魚ありし描見  
ひし物あり是自然の其氣を押ししものなりこれに  
天原の風を以てするあり海に胸を以てするあり  
胸を以てする胸を以てするあり石を以てするあり  
擗を以てする胸を以てするあり他郡の山を以てするあり  
ふるふるありし地を以てする星を以てするあり

其六 無縫塔の南を以て谷陽谷門の溪流數十石  
の廻りて百石ばかりの間岸を以てする石を以てする  
住僧入寂三年の前必し廻りて墓を以てする石を以てする  
の上にあはれする其石を以てする石を以てする



然りて来はの人知いりて是を無縫塔なりと衆目  
乃さ其皆いつやう其奇怪いつやうとも言ふがたし  
たゞ衆人の名をさう其名義を別に抛入るるに  
しよそののいあげてとせし先年任職し和尙  
其石を削り投入て日次大なるいよむに死まうとて其  
場を寺を出て再びゆきしに合つたかへ長寿内  
と入り其奇甚し一尺許ありて寺に墳墓をうけに  
其石十四五並べり余の常の無縫塔人伝る信列四部の  
温泉寺け奇と相同しといふ事なり其地いよむ  
る人らいつやうに水底より無縫塔の形をい  


やうなものであり其いよむ追て考へて一奇  
ハ怪といふ事なり

其七 火井三条の南一里ほつ心の林麓 ニヨホシヤ 入方村 即入方寺村ヤリ又  
妙法又如法寺

其地よりある所の家戸の角に石をいよむ其石は竹をさ  
火をいよむ即声ありて火をいよむ盛に燄をいよむ  
縦横に竹をいよむ其竹の孔より皆火のいよむ竹をい  
いよむ其火のいよむ火のいよむ火のいよむ火のいよむ  
火のいよむ火のいよむ火のいよむ火のいよむ火のいよむ  
硫黄の即火遠く土中に入り地中も又燄をいよむ是は必身水  
油のいよむいよむ國中是は必身水 カハラヤ 柄目水村

即入方村に同じ寺泊大和山の間川ナラトニリテホリタの川の水はあつて冷あ  
つぬい。常は湯の沸かぬく泡きくあつて是に火をくわせば  
忽燃ゆるの如く朽尾の御比ねとつふ山澤の水に火をくわ  
せば水より火燃ゆる魚沼ウツミ一古村山間の河流カハシツに火をくわ  
せば三尺とくくくはく火のゆる古志郡見降川舟後ある  
下川原の砂に管ツツをくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく  
夜力にゆるあつ甚余あつてまゝ一頸城郡上野尾の原  
谷間より風の吹く河ありて火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく  
燃ゆる如く車輪又同郡吉村大滝手近末井と掘りに  
燐石の吹く火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく

甚奇なり水戸赤水先生け一奇を以て甚奇を即琅耶代ナラヤ  
醉に火井の説とあぐ又大明一統志に蜀地雲南に有  
火井又過二三所とあり只一赤水の真羽新丸に昂牙  
仏逆竹八房梅を七奇にあげて執人はホの白癡シツカクを奇  
とあぐく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく  
はく農丈高客ホの蒙説をよ北説に人あきく火をくわく  
火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく  
火の精識は火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく  
是陰火は火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく  
の火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく火をくわく

何ぞや陰火に陽火にちりぬる思はれり

右ハ古の七奇なり

俗説十有七奇

其一 神樂山獄のわづらひしるも山中人無事なりと雖も山に  
忽神樂山を奉りしる事ありしりて忽に其山を崩れり  
中江屋よりして山を崩れり所の境村上山とつ下地を  
是より崩れり今山は川にまゝなりしりて早稲の年其  
地より崩れり末は山を崩れりしりて山を崩れり  
歴々其山を崩れりしりて山人を崩れりしりて山人を崩れり

其二 箭ノ根石

石鉄

石鉄

後方の好事は表にけ奇を記す其

形後とありて其品ありしりて其品ありしりて其品ありしりて  
しりて其品ありしりて其品ありしりて其品ありしりて

よも又統あり多くしりて一寸なりしりて一寸なりしりて

古より社地古坪跡畑ありしりて雷ライノワセ石を崩れりしりて

又傍に天物のメシガイとてしりて石鉄の似たり形異なりしりて

堀形に大光寺村山畑神思山 三島那とて園コシノヨシノ浄湖の山京入村

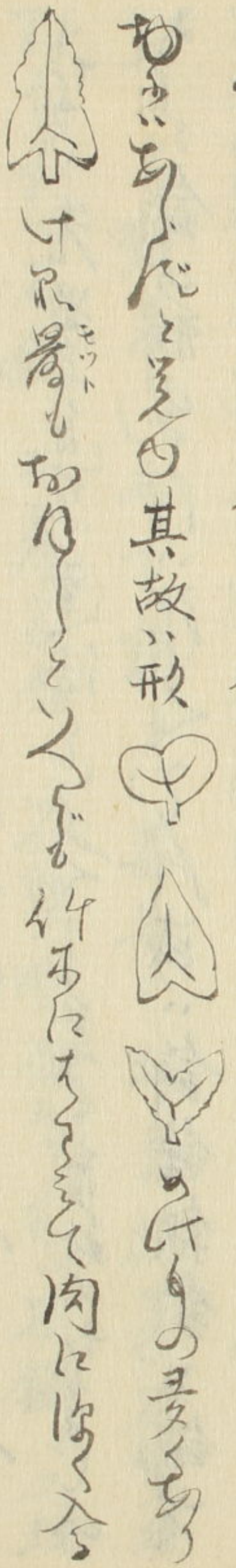
後江村長を園竹森の村古より社地ありしりて雪中に土のくちり

飛放て竹木にクサ鑿金ちりしりて浦原那とて伊夜日子山下



余日を歴考してその浮屠たるる石亦うべん鏝に似  
 たる石或は白或は赤とあり又三代實錄に仁和元年六月  
 廿日武内國初田城乃饒海那神宮の西濱に石鏝と降る  
 同二年古名國饒海那神社の辺に石鏝を降るんといふ  
 是れは上古より既に其神奇と説ス今世好事のりの是の  
 人作らざる石と石と云ふ亦割るもたれ物け形と云ん  
 とし其處に今屏の匡某ありの事してつづき作らざる  
 昂にしる其形似しつづきあるんといふ也其色  
 の傍に大なるといふものごとし昂其色も白も色  
 古く降玉と云ふもの五六品出らるるに其匡はつづき

信服也又江別石亭りたるもの其人作らざるを論ずと又或  
 人上古を造りて竹木のえきには挿さるる鏝を稱し是又  
 瑞玉に似たりと説あり石鏝上出るものより竹木を削り  
 してつづき鑿きたるもの竹木にさしはさるるにたれを削り  
 ちりてあぶんと是も其故の形



竹木のえきには挿さるる鏝を稱し是又  
 瑞玉に似たりと説あり石鏝上出るものより竹木を削り  
 してつづき鑿きたるもの竹木にさしはさるるにたれを削り  
 ちりてあぶんと是も其故の形

古く降玉と云ふもの五六品出らるるに其匡はつづき

珠玉のてしつづき

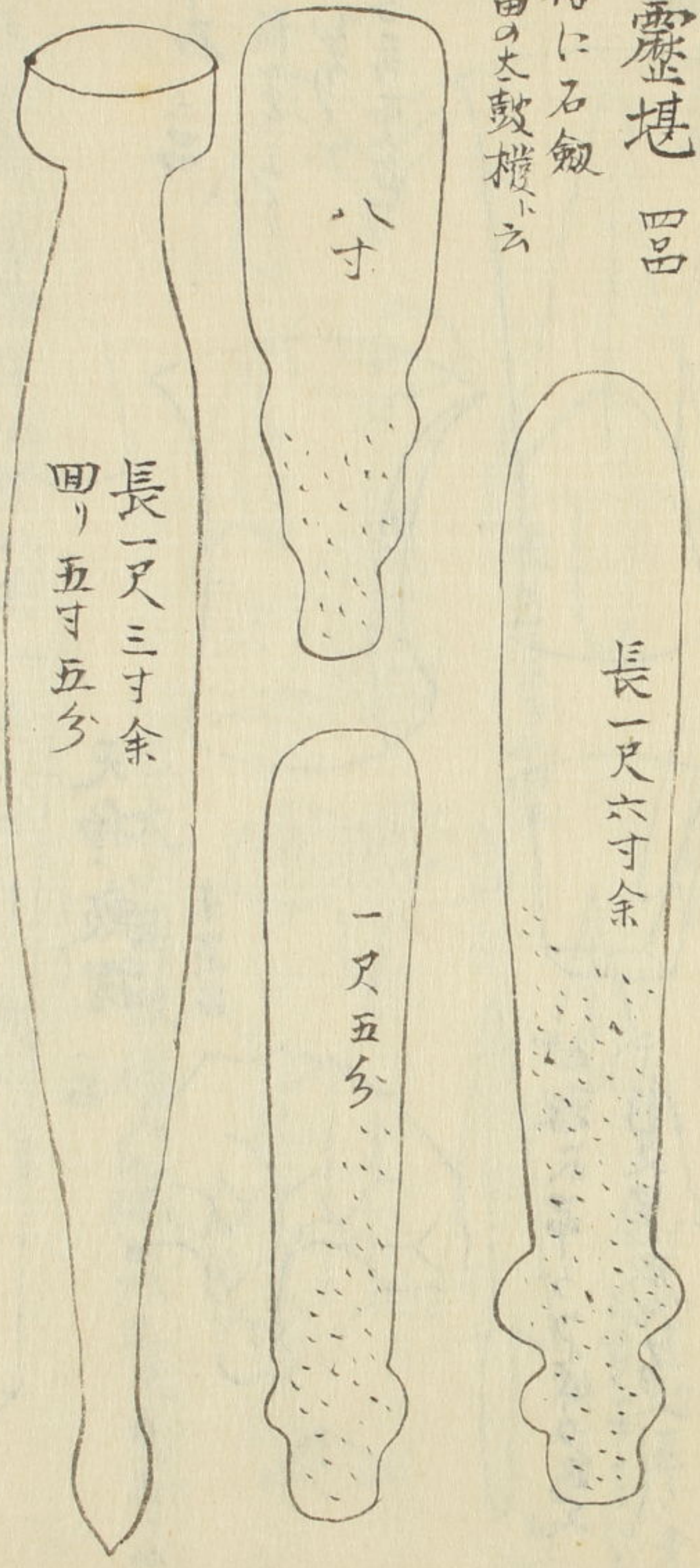
鐵槌けり碎き鉄ききり上古人何といひ北國のこに記す。  
 いふ所又或人は自也といふものなり是は莊子  
 の見へ何れやとのれが智ふかびくものなり皆自也といふ  
 ことばもしやなり物理をゆかにせんといふことば  
 もち先愚ふ自ら達物といふなり是も自也といふことば  
 むす鉄の形のものに記すべし或は鉞鎗鉄鉄刀釵戈  
 戟鉞鎌鋸又ホ其餘種々の形のものなり是を扱むる  
 鬼神の詭ひりたり本まに石斧といふものなり  
 霹靂石は楔く礎雷斧皆け都にあり是は人何れを  
 一其石質は麻不やれは石石琢磨して形をなせ

りと是由其石ありたりまた必や霹靂石は自也其形  
 も定りあり大小數品あり玉の如く石なり群石の如く自也に  
 片ここく割るべしはけ固石鉄の類ありたり雲母石  
 石燕の類又荊州梁別肅慎國を石とて云ふは石なり  
 是は石救年けをて識るに其多くありは石質兼  
 ありあり石鉄又兼ありあり石質明徹ありあり石鉄又珠  
 玉の如く其石色又白く其内意息のありたりあり  
 たり人何れをいふなり又あり燕石といふは是なり  
 たり石け鉄をいふなりは白く儒長海にあり石鉄をいふ  
 東船の清人小ありは清客といふ燕石ありたり大ありは

入りきりぶらりて寝てけ人櫻け倫とせしとそ西あかりき  
 のきりてあめの人入燕石を包て玉とせしとそ西あかりき  
燕石即燕の國より入りて玉とせしとそ  
け邦陸より津石と稱するものなり  
 玉に得るもの知りて本州霹靂石  
 け邦の落目星石俗に星鍔ホシツバとすものなり今北越信列作  
 別て余所山中にあり空中大陽の氣禁統も忽ち光  
 を落して光をその地に落して別化して石とせしとそ是  
 たり其火光大なるは俗に光りりしを夜星とす  
火を落して言て真の星なりや 霹靂石形不一とそ多色とそ  
 色漆玉白赤青とそ其光形洞以明徹如玉俗に落目星石  
 又星鍔石とす

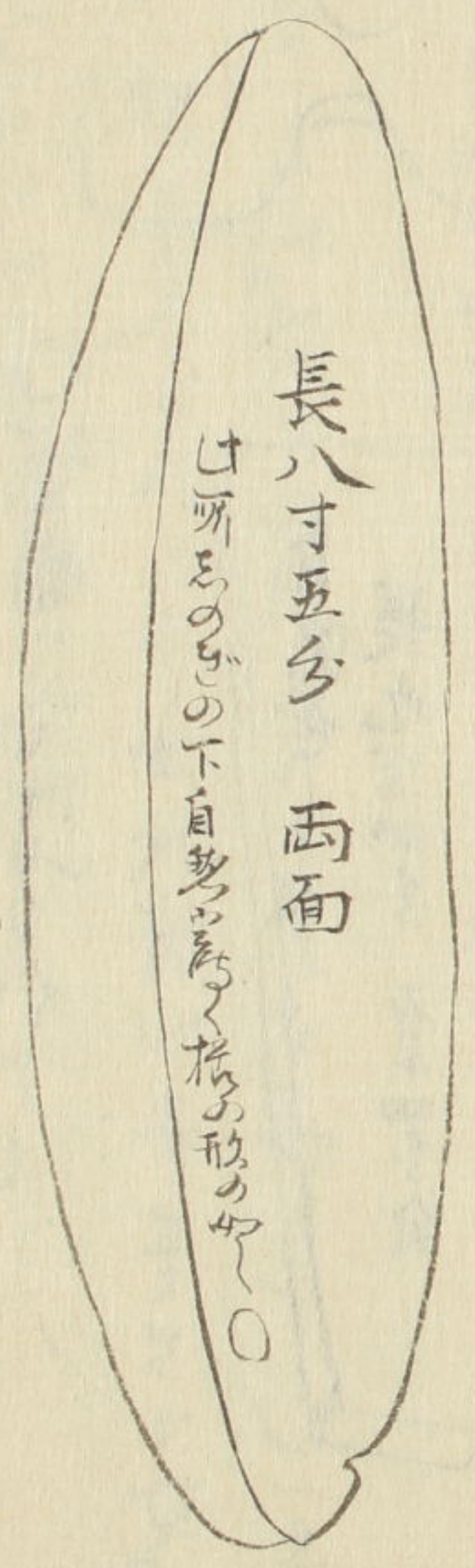
霹靂堪 四品

俗に石劍  
雷の大鼓楯と云

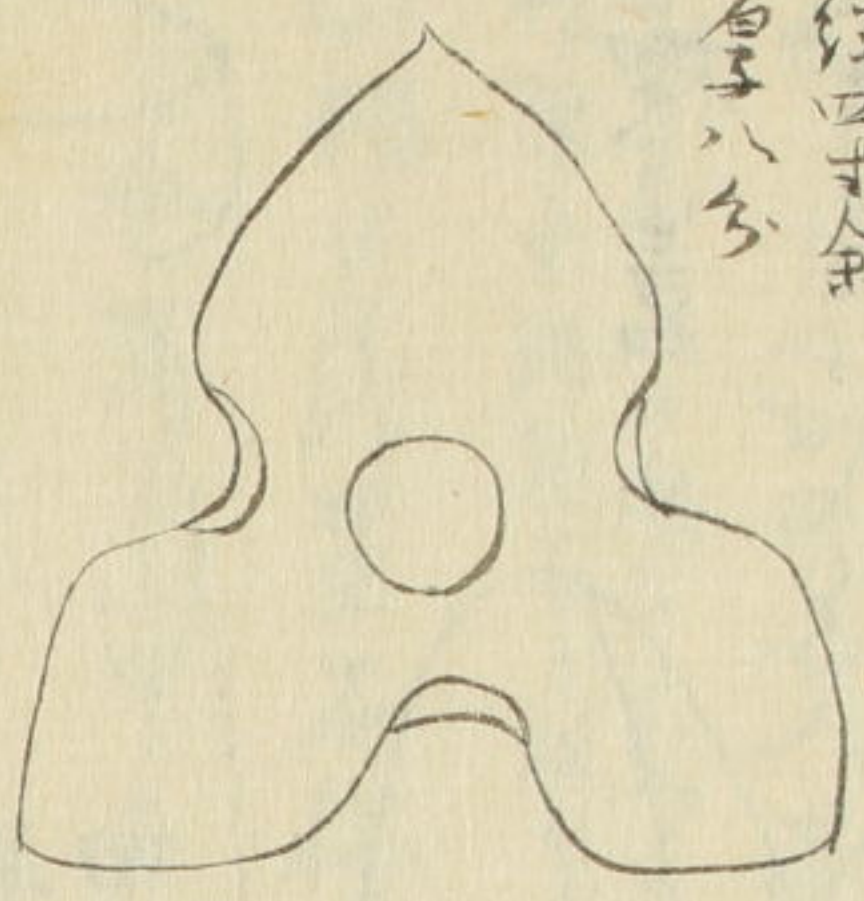


霹靂楔 三品

俗に大勾玉  
鬼の多形とす



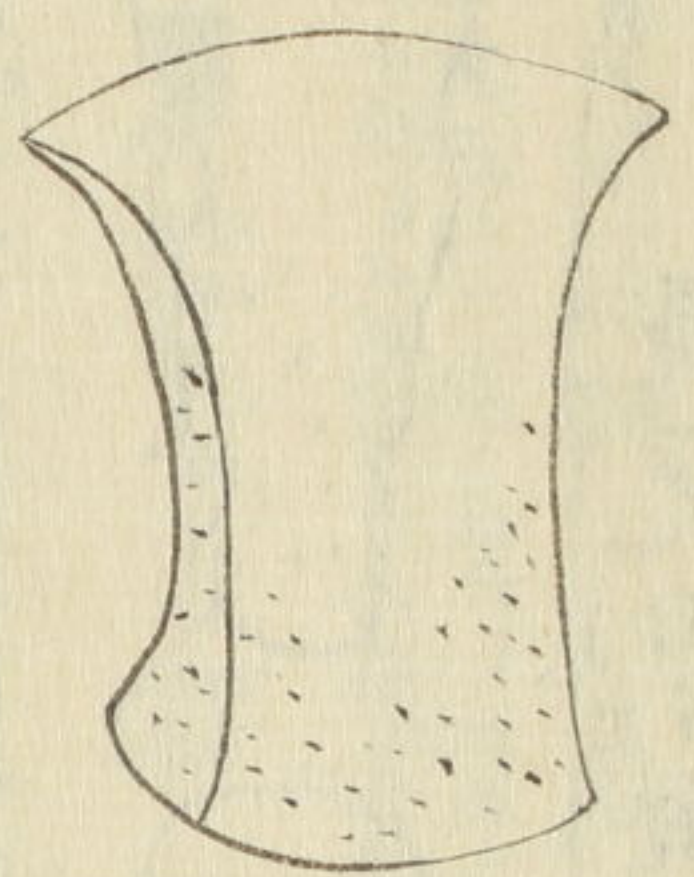
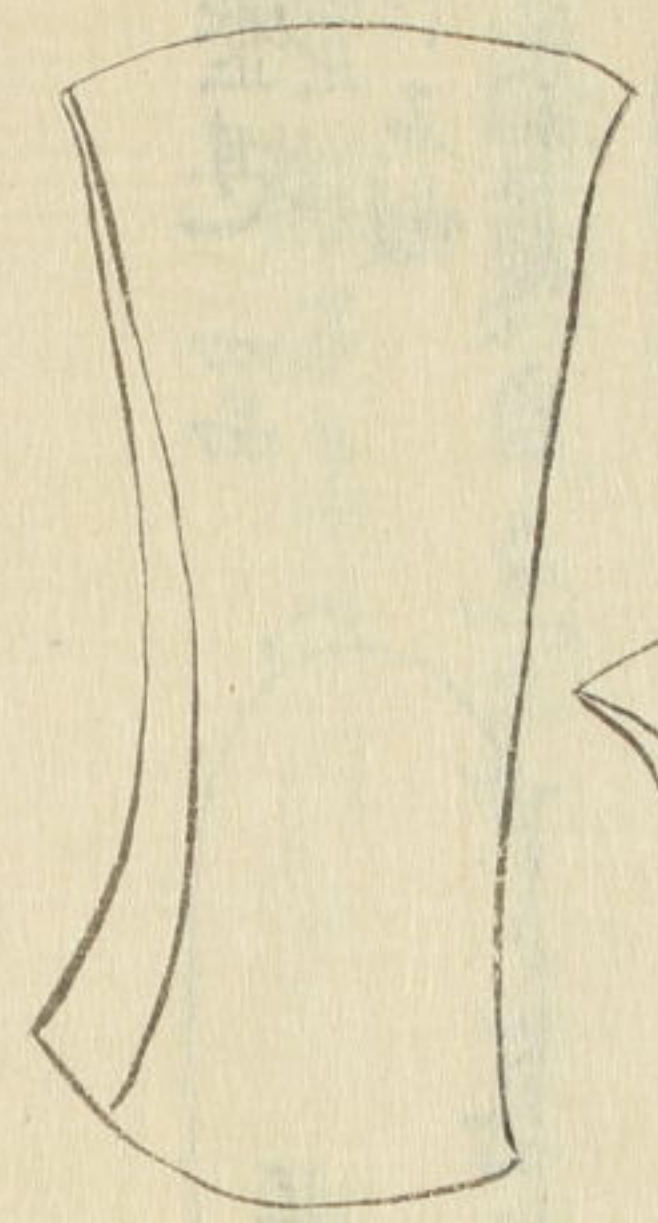
徑四寸余  
石子八分



○け二圖の上こはつ〜

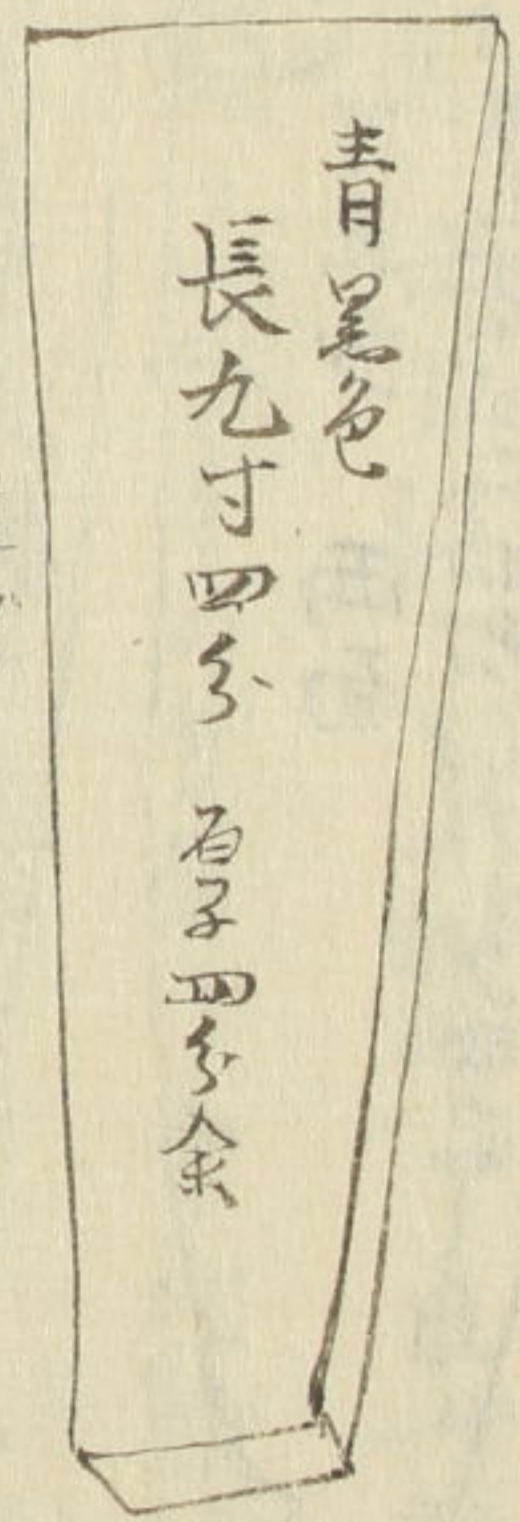
雷斧石 三品

俗に瓶をさし  
け取あけし  
ころろ灰色

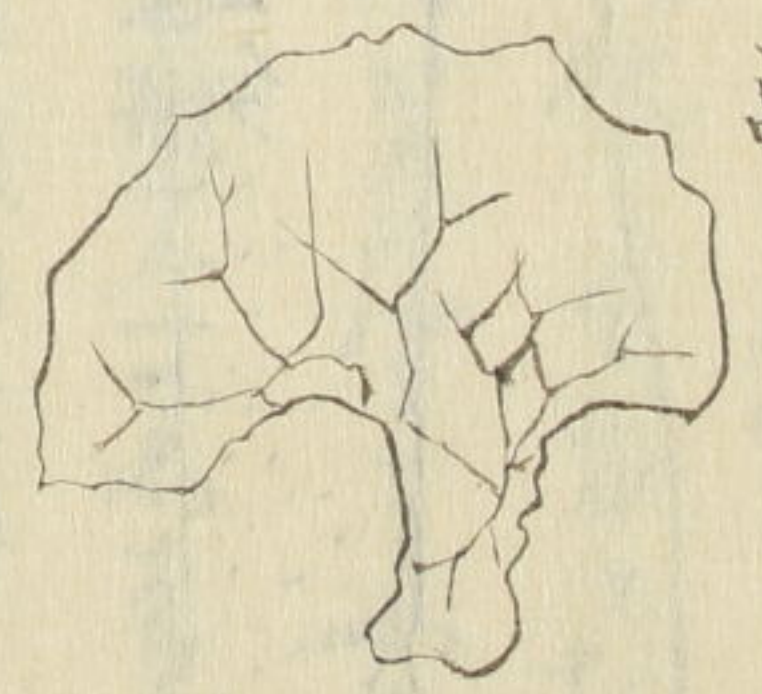


天狗飯椀 一品

赤色石

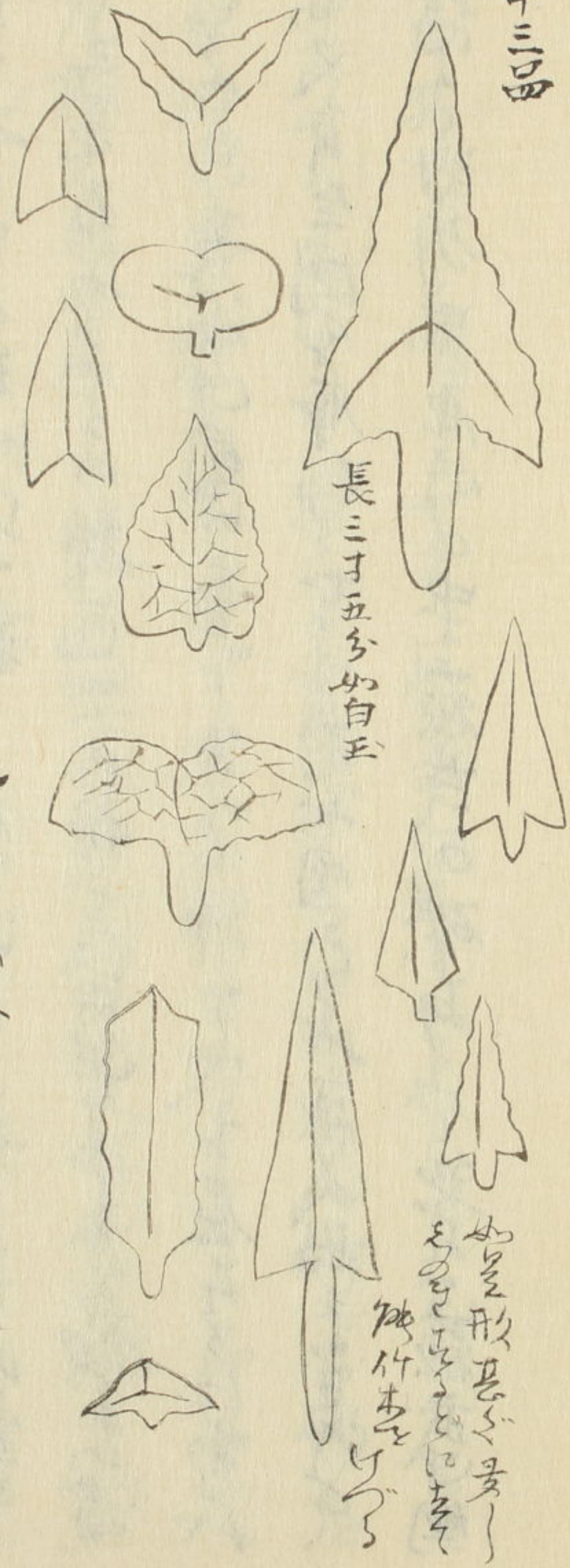


青尾色  
長九寸四分  
石子四分余



け取あけし  
け取あけし  
け取あけし

石鏃 十三品



長三寸五分如白玉

如竹葉形  
け取あけし  
け取あけし

○大小異形俗に箭の石又矢石ト云

け取あけし 白黄斑如玉 黄土色ハ多く有る

石鏃品ありしはけ取あけし風の石をさしけ取あけし  
羽列をとりしは石をさしけ取あけし今世北越け奇異さかゆり  
他邦より是れ出づる者必ず石の形をとりしをせん



或人の曰汝類に鬼神を信し婦やのいし言鬼神を  
有て此の工をわすしとあらんや 吊が白鬼神又やまにあん  
易に遊意変とやまはる鬼神又まはる鉄といし  
也ふあふ上古神傳の死を凝結して不散一念只鉄  
と磨て鉄を對せんん其え石成字がく想け形とす  
吊もいしとくまを以て制するもつとあらん一六内雪と  
り三年るつとるの類匠のねたのけしとて我死の遺  
恨もや只其はけ國の奇と争つ吊一人を屈するにあん  
汝も又自生國を辱しつとる於此國はつとる或人西に坐して  
曰我より羽列男廉路の中蘆武の碑ありと然れ蘆武は國

に節死せるを明しや是は事にあらずやと吊矣曰云々  
人の及んん中華を賞するたあらん何を本邦と  
しと強て夷狄の國とあ 是を快むとせが即云也  
又尤襟不毛の辱しあはるはあらんや是好奇の過と  
又云國字といふ章を文と云吊がホのるびと云の  
したる西海番教する俗説とあらん其の中本邦の事  
と論るるに必しけ國何とて以て奇とん是れ也  
とらに是れん中華の書はけあの國已にあると説する  
やと吊密にわらふは彼國を賞して本邦を辱しし  
文あり吊是を論せる中華の書何とてあは記されん

不珍たる本邦にいはれ奇あり即是ありそ本邦破國の必城  
の實を詠したるは又嗜龍子自言け信託を詠し人有  
りと信し其入に而んて高論を以ん是れ其の意  
と詠せり吊を以信託を三編とて其のひら其中に  
時頼有吉而公回國の論ありしれ其語多し嗜龍子  
二公の意を以察とて之を以理の妙に之を以て  
何を言わんとあらんや吊が石鐵の論も又信の好事を妙  
論ありんことを以て之を以て

其三 鎌鼬カマキリ一 様太刀カマキリ 信不主ありそ其の社氏を以て  
不主に面部年足やんとは肉割破んて自ら信せり

小宮城部  
佐藤國  
イタテニカケ  
ラトトホ  
アリ其  
アタルトコ  
キレテ佛  
ト千金  
フクノミ  
音ノミ  
カニミ  
シカス  
石草根  
味草  
法フ  
ナリ  
拾テ  
敷  
愈  
信  
料  
骨  
カ

やう麻口の大小にありあれとて血もあはれなく何の  
もまに名づつたものやう或は鬼神の又には  
り其船を以て舟を以て故に様太刀とて之を以て説あり  
りて其れん鬼神の北方陰子の地にあつたりとの  
坤を鬼門とて信し少紙の鬼神の奇甚まらん  
天地の化長し人々満つて少紙を以て自らを幽冥に  
まらんとて是を以て北風三十五年前年まで其の  
今も其れありて伊夜日子より國上にはけり  
是れを以てあつてはあやむく瀧倒す者必け舟を  
と所にはあり又一説は寒氣皮膚の間に凝結せり

勝を治るとは皮肉さけ其氣鬱々として是國家の既た  
るべしたあふ甲信の二國奥白河の辺に極りて地多るやふ  
にして寒多し誠不信すとて計奇却て甚どしとて  
又其治方に古き曆紙を授て賑わふ却て是地を去るに  
んりて指ひて又鶴を以てあぶむ是を鬼神の氣ありと  
せりて今他邦に計奇稀ありとて

其四 四蓋波 四海は 頸城郡名立の下場浦とて云あり。  
海をわたりて四方より四つふ井とてり是磯名左右に岨ツルメナあり  
ゆゑにけ終をせりてとてり五つふいのほをたんとり  
敵て奇とてり是は俗流高名の信とて四海流とてり

只目おぼりのこの名は四蓋と四海の意をこへるべかり蒙教を  
しし出せりとも他邦の人に對して 平定稱ふ面赤也。

其五 冬雷は海気休の通にして南方の國に異なるもの  
是に似たる南國の梅は正月に開き北國に三月ふりて東面  
のありをそりて是をせりて平定國に二月に開く候りり  
是皆陰陽遲速の同しありとてり

其六 三度粟は南原郡白村にあり穀粟とて人の粒とて  
とてり田舎あり七奇の穀ありては計奇なる奇ありとてり  
とてりあつて是は粟竹篠ありとてり近年は粟とてり  
粟とてり人の粒とてり田舎ありとてり

其七 沖の題目、角田濱海上に、日蓮上人の旧跡なり  
沙風靜なる日海上に題目の文字浮き出たり、沖舟の  
又つらふにねあり、その信を、そのふるまひに、  
なり、羽別窟が洞に梵字あり、其源湯敷山より出、  
流水の彼、梵字、又ゆゑ、つらふに、是等の愚民  
を辱くたゞりの身と、是らに、

其八 沸壺 ワキツボ 熱壺 ニヤ 蒲原郡柄目本村 御油の、十丁、  
隔て山の尾上、此のり、たゞ、徑四、五、尺の井あり、其中水  
自然に沸き、三、四、尺外に漏る、所あり、また、塔、藏、を  
一、是、裁、申、志、山、南、部、怖、ふ、ま、の、い、地、中、硫、黄、の、丸、あり、

臭水油の氣泉脈押、く、け、動、揺、を、ち、ま、る、く、之、を、裏  
宇記に云、咄泉の類なり

其九 塩井 三島郡、と、板、より、西南、山、の中、塩、の、入、板、沢、中、に、也、  
又、朽、尾、の、東、山、の、る、塩、中、村、溪、流、の、中、に、井、あり、其、村、に、是、を  
以、て、食用、に、當、り、吊、其、井、水、を、咄、ひ、ま、に、甚、鹹、一、俗、是、を  
以、法、大師、の、旧、跡、と、し、水、戸、赤、水、子、前、の、火、井、を、賞、し、て、  
曰、け、奇、ひ、と、浮、屠、子、の、眼、に、觸、る、を、幸、な、れ、と、ゆ、俗、  
説、を、傳、好、謬、と、稱、す、又、白、保、十、三、戊、申、年、二、月、魚、沼、  
新、保、村、を、半、夜、の、庭、隅、の、石、の、下、に、白、塩、以、て、出、し、て、是  
に、為、井、と、し、一、月、ば、め、り、り、と、自、然、に、抜、ト、や、ぬ、是

その地境の疑信を了るの代醉編に木陰木の説をあげ他邦  
に石塔の奇は多しと云ふ然れども其中石塔は最奇なり  
其十 逆竹新浮の上なる石塔あり是處上人の旧説にて  
今も或竹皇幽達と云ふ逆生の竹ありと云ふ  
今に絶てり一と七奇にあらん

其十一 即身仏三島郡野後法号善弘智法印の肉身之  
又津川沢玉泉寺淳海上人是も入寂の相今にも朽現存  
り赤水を流すを説く其説言一突に塔と云ふを言ん人言  
下河ふべし是れもる地ありて七奇に如くは民間の俗  
七奇を云ふ事餘に他邦の家に同祀せられて是れをいひ

出に何れも昂るに何れもよとのとあり

其十二 七ツ法師ハ亀頭城が高田南龍徳山にあり夫の時日  
西に旋るにありて滝自く見えし申のあり即滝の中央  
尾く法師の形ありて其地をいへるをいふ  
之れを是れ西國を向の庵にも記さるの形ありと云ふ  
遠近の寺高樹の蔭あり相映して其形をみる  
今町ハ鴨と云ふ寺ありて是れも景色甚し  
又糸魚川の辺りに牛形と云ふ奇あり雪解のときは山畔に  
見ゆ即大石あり残雪の中に云ふあり

其十三 八倉梅三浦原郡中島村にあり即親家上人の旧跡

二聖帝  
 今世はあつたといふ所の歌をせしむに  
 五百年来の古木にして老根の虎屈一枝の竜蟠する一樹  
 は木にふれ天をさし地を掃く雅致のつらげ其花は紅八重  
 の大輪梅を坐を争うて用を其ほ香芬然として数里に自  
 ら布遍く露園の老梅を見ること其奇絶は是に對して  
 るものなり其事實情の氣味あつたやとて敢て論の  
 ありん

其十四 風穴 風洞  
 三島郡雲上山國上寺跡陀堂の後地壁の  
 下に徑り尺ばかりの窟ありて風をせよと扇風の力に比せ  
 べし俗説に角田濱の洞には相通してけ奇となるといふ其

間凡伊夜目心を隔て三里ありけ説はさういふべしとて  
 又此に風のつらげとて扇風の力に比せ  
 自是石をを落しとて又地中泉脈の通るをいふとて大山を  
 穿て溪間を通りたる又頸城郡山に風洞ありとて  
 見水徑河水南送北屈縣西十里有風穴山上有穴如輪風氣  
 蕭瑟やると即雲上山の風穴といふべし  
 其十五 蓑虫の火燭の傳何れの山に踏む細雨蕭條を夜  
 蓑多にひらきかきとて者あればかきとて蓑の毛に螢火のどく  
 光のなきをいふとてかきとてかきとてかきとてかきとて  
 かきとてかきとてかきとてかきとてかきとてかきとてかきとて

とていふことありしに、いふに、つらやを動かさざるに、又自然とさるる  
る事ありしに、いふに、つらやを動かさざるに、又船中湖水の中、有  
り、狐狸の怪ありんとうり、説ありしに、たあらん、是れ鬼也、  
先学庵筆記、田野、菱、苗、稻、穂、雨、夜、忽、火、の、説、を、つら  
是古戦場の燐やと云せり、相同し

其十六 土用涸水々古志郡長岡アチシカ蒼葉明神の山下中沢村  
三谷内村田間小島を所名のりしに、涸る事、六月土用、  
入前より水がしづ土用中、涸水涸る事、十八日、歴  
て、改、に、水、減、し、く、り、一、説、に、小、松、内、大、臣、平、吉、盛、の、舎  
が、池、中、細、言、頼、盛、持、持、一、谷、居、城、の、後、け、團、に、あ、る、藤、原、歌

三又の城に入し中沢村にありし水をおもむに、時六月の炎、  
あつし水と無る水、即以杖地をさし、得えし、説、伏、見、将、軍  
源頼義の傳、いふに、信、し、り、れ、を、何、れ、け、泉、の、音、賞、を、し、  
其十七 白螺河に親しむ古志郡、石門、山上、芦、々、平、お、馬  
追、り、池、に、あ、る、他、郡、の、人、あ、り、是、を、つ、ら、や、を、お、も、れ、お、お、  
先、敢、て、ゆ、き、ん、ぶ、か、い、す、一、平、は、是、地、神、の、お、も、れ、お、  
山、上、に、あ、る、ゆ、き、ん、ぶ、か、い、す、一、平、は、是、地、神、の、お、も、れ、お、  
ぬ、り、熊、手、お、れ、ま、い、ん、今、他、郡、の、人、池、を、つ、ら、や、を、お、も、れ、お、  
さ、ら、と、し、く、平、弱、冠、の、し、ら、四、月、廿、四、日、所、に、あ、り、て、池、を、  
一、黄、昏、に、吉、々、平、に、お、ま、を、お、も、れ、お、も、れ、お、も、れ、お、

六日まて留宿せし其の中村先に移りて山中七池水と  
しるめせし白螺田螺のころそよあり

昂今の七音を名をんとしるに古の七音のくち  
捨ぶらざるものあり新しきに如んと欲せむあり然  
るに今他邦に同じ音とあるとすも音あり  
よの音あり又俗の人暗の字をいこころりて後の  
七音と撰述しゆり

- 新撰七音 石鏃 録鼈 けこ音古の海に 白色に鳥
- 火井 燃土 燃水 胴鳴 無縫塔 けこ音古の古より 賞祿よりあるたしん

○樂浪之淡海 又鳴海

樂浪はとて地名にて滋賀郡にあり書紀小筱浪郷萬葉に  
樂浪海 樂浪之國 津御神 神樂浪之大山守 せとみえり  
千載集にいころる也志賀の郡にあきけりと芳あがらむ心  
標するもあきせむわんふ滋賀郡 樂浪の國とてしる  
の都のころりたる所の海とてしる也とてしる也  
乃海の冠辞とありたるをてしる也とてしる也  
記に於是其忍熊王與伊佐以宿祢共社追乘船浮海  
歌曰伊奢阿藝布流玖麻賀伊多豆波波受波迹本栞理  
乃阿布美能宇美迹迦豆岐教那和昂入海共死也とあり





四里東西狭くしてを累年 忍途の麻屑のたぐく弊田  
うらうらとて海老尾に比して竹生路を西復もたると  
たつ穂の浪も日本記神切紅もく浪とてうらうらとて  
のうらうらとてサバ小の意うらうらとて浪の瀬うらうらとて  
近は旬樂原のち原の空もよらうら。三津の浦とてうら  
志聖の浦とてうらうらとて元ハ海津とて

あつこの海夕浪とてうらうらとてうらうらとてうらうらとて  
うらうらとてうらうらとてうらうらとてうらうらとて 東人  
に海の海やとてうらうらとて水と秋の月こう浪とてうらうらとて 定石

俗傳に孝靈四年江呂の地推て湖水始て湧小敷の富士  
山忽出季景行十年湖中竹生路涌出スうらうらとてうらうらとて

○磯前 八十之湊

萬葉集に高市連黒人 羅旅歌八首乃中 磯前榜今四行  
者近江海八十之湊 尔鵜佐波二鳴とあるをわのれとてうらうら  
とて磯前ハ坂田郡ヤウ 磯崎村八十之湊ハ大上郡ハ坂田村  
の名もさうとて宣長とてうらうらとてうらうらとてこの八十之湊ハ所  
のあつこの海夕浪とてうらうらとてうらうらとてうらうらとて  
たつ穂の浪も日本記神切紅もく浪とてうらうらとてうらうらとて  
のうらうらとてサバ小の意うらうらとて浪の瀬うらうらとて











ほむのいよにあらはれし神乃ゆ名をそく高倉下<sup>タカクラジ</sup>なり  
ゆきあり高倉下<sup>タカクラジ</sup>の神武紀曰彼如有人号曰熊野  
高倉下<sup>タカクラジ</sup>忽夢天照大神謂武甕雷神曰夫豊原中國猶  
聞喧擾之響焉宜汝更往而征之武甕雷神對曰雖予  
不行而下予平國之劍將自平矣天照大神曰諾時武甕雷  
神登謂高倉下曰予劍曰部靈今當置汝庫裏取而獻  
之天孫高倉下曰唯々而寤之明且依夢中教開庫視之果  
有落劍創立於庫底取以進<sup>イタ</sup>なり  
板宮<sup>イタノミヤ</sup>と潮宮<sup>シホノミヤ</sup>とありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
板宮と潮宮とありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ

さきのやとありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
とて風土記に安置驛家此謂板来之驛とありしなりしをいふ  
いふし海邊<sup>シホノヘ</sup>とありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
かきしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
濱とありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
り神跡ハ驛路の鈴<sup>スズ</sup>ありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
と宮本<sup>ミヤノホ</sup>管<sup>ツツ</sup>村<sup>ムラ</sup>とありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
嫡子<sup>チクシ</sup>にありしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ  
のりしなりしをいふべし自の言に潮<sup>シホ</sup>とありしをいふ

○時平大明神



大冨菴を廻りかきたる澄海隨筆に下野國安模郡に  
古居村といふ所にいほりぬ神は藤相公の御霊と云ふ  
隣村神同といつに榮と云ふ菅相公と隣村といふ  
中あし此二村男女の縁をたしむべし此事ある古居村  
に梅をくまふ衣あふ梅の縁をはもむと云ふ事  
いふ所

○菅原の前

伊豆乃國を三トといふは三ノ國といふ事なり  
其の三トのあはれはキセウといふ事なり  
其下乃山に頼政卿の女君を菅原の前より廟ありといふ事なり

二所トモイカニカクトモ  
ソノ事サキモラニツ

芦の湯へ御宿の宿きくしてしりし河川の合致に宮  
うちまのひらぬが深三位の御仲細をいふ事なり  
連ねりしと連ねやあふ事なり其見しと記別より船の  
のりて伊豆國へ宿りぬ事なり伊豆はあやめの森ありて  
外に同國にやまをたしむる靈廟をたす事なり  
家系に三と云ふ其後高麗ゆかりの事なり農業者  
やあはれに鎌信のころはくさしむらぬてしりし川中  
乃合致ししと我切なりし事なり農業者  
をいふ事なり其の事につく事なり今宿と云ふ事なり  
伊豆乃廟を遠くいふ事なり其の事なり



名を設セツく又和漢同日の謗れ思ひつゝ人ごころ彼の  
望夫石と云ふの貞婦其夫の役に行に恋死して化して石と  
なりしはあはれ江山の自然石人の立望タツノミがこころをさ  
し望夫と命ナツクふ又詩文者流のつづらねたるも程伊  
川の説を引く録倉志に云り梅まらに望夫石の古史の  
録に出る又石まらに望夫と名つたる者あり忠別に望夫  
樓又望夫臺あり大明一統志に引く又述異記に載る  
想思草五雜俎に引く石碓風を望夫れ古事の  
いし亦是小説者流の寓言怪しむにたゞんやわに  
我國西國の海濱も望夫と稱する是あり又録倉龜

ヶ谷の石切山に望夫石あり志に云く畠山六布重保由比が濱に  
て歿死す其婦けしに望望みて恋死して終る石に化して石  
にやうやくと言傳るを枯骨の化石もたまにあり和漢の  
貞婦化して石なる其全骸を遺るを望しめし思ひさるに  
あはれ領中麓山の史も推してさるべし常々梅まらに日本  
記に引く調ミツ吉伊企イキ能ノか妻大葉オホハ子が初ハツより傍ワタリ良ヨシが  
傳ふ似る疑はれ後人毛モウに大葉子が初をとりてこゝに  
領中麓山の名を設セツるるに数りを抄書して遺忘  
にゆゑなり

天皇二十三年遺大將軍紀男麻呂副將河邊臣瓊

企令討新羅而其軍不利時為新羅所虜調吉士  
伊企儺為人勇烈終不降賊新羅鬪將拔力欲斬  
逼而脫禪追令以尻醫向日本大噓叫曰日本將盟  
我臆睚即噉叫曰新羅王啗我臆睚雖被苦逼尚如前  
叫由是見殺其子赤舅子抱其父而死伊企儺辭旨  
難棄皆如此由此特諸將帥所痛其妻大葉子亦並  
見禽愴然而歌曰

柯羅俱爾能基能倍爾陀致底於譜磨故惜比禮  
甫囉須彌母耶魔等陞武山底

或有和曰

柯羅俱爾能基能倍爾陀致底於譜磨故惜比禮甫  
囉須喻那備波陞武山底

八月天皇遣大伴連校年亥領兵數萬伐高麗校年亥  
乃百濟計并破高麗以上據

このまゝのありつゝの事と皇のまゝに倭の事とちか  
高麗と討つゝの事と伊企儺の事と大葉子の事と  
城の事と此れ甫囉須弥と初し其夫と追悼せし  
あやうく倭の事と高麗を併用する事と也  
いふ事と似たりやといひし言の序なり  
はしる大葉子の事と初し其夫と追悼せし  
韓国の



用利於返流夜麻能奈とありて今其止を比禮振と  
よぐらうまらた亀井道載が語の信用暫がりいとやむい  
減るるし今其徳心とありて今其止を比禮振と  
あつて其河にさしをて殿にすりて今其止を比禮振と  
あつて西国にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
取捨回天草の人の其情ありて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と

たりあつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と  
あつて今其河にさしをて今其止を比禮振と

○高千穂峯

日向國高千穂峯とありて今其止を比禮振と

又一かゝる千穂とていふありて豊後とて名く地なる方  
 日本神代とていふ所の高千穂等ハたゞの言ひ也とて諸書  
 に多く言ひ出されども是れは是れ智也とていふべし臆  
 するを許さず昔もいふ高千穂とて上輩と結ぶれば其山  
 二重なるにうつて名をいふありて其の言ひは東西  
 二重ありて一対々天逆鉾ありて東の言ひもいふに五列あり  
 たりといふ地心にはいふ言ひにありて高千穂といふ言ひ  
 衆心の中にあつて是れ言ひにありていふ言ひにありて  
 ありて地心とていふ言ひにありて高千穂の言ひもいふを  
 結ぶ言ひにありて橋春暉が北窓瑣語にありていふ言ひ

○日本、高山多し

王充が論衡に大山の高き天に交り雲に入るといふをなして百里  
 以上とて堆塊とていふ言ひにありて唐土の里程ハ彼れ日本の五六丁に  
 ありていふ言ひは日本通とて十里づつとて教ふれば又いふに  
 中野是を思へて日本の高山多きを國ありとて白くいふ  
 言ひは信州の名をいふ言ひにありて皆教十百里を隔つていふ言ひに  
 ありていふ言ひは北窓瑣語にありていふ言ひ

○胡燕

若穂國山谷の間に其の燕ありて常の燕より其れが稍大と  
 其所の人の風多とていふ言ひにありて中野にありていふ言ひにありて





こゝ下十カケもあつていふは是れ又奇中の最も奇なりといふはた昔の  
海は乃海の淵を穿て大けのこゝに海の高流海の中なりとい  
東へのそ流もいふ是れ奇なり

○曼草の古説

葛草朝の瓜のたれを食して曼草の根をのぼりて  
巻くこと五尺自然に信じていふた巻るは是れ日夜天の左  
旋するは天の右にりていふは是れ是れと楊春暉が  
いふは北窓瑣語よりいふは是れ自然の理なりと申す師  
産霊命は通大人の太人の信じていふは是れ是れと申す  
しゝいふ

